

茶の文化地理

——魏晋南北朝時代を中心に——

関 劍 平

まえがき

本研究では魏晋南北朝を中心に唐初も含めて喫茶文化の地理的な特徴を明らかにする。

今までこれに関する研究はされていなかったが、南北朝の喫茶についての研究では南北の差が必ず触れられる。

魏晋南北朝の喫茶について、1990年代以前具体的な研究成果はなかった。しかし南方には茶を飲む習慣があり、北方まで普及しなかったことは一般的な認識であった。¹⁾ 1990年代になると、歐陽小桃氏は宮廷から民間まで喫茶が盛んになったが、北方の人は好まなかったと指摘した。²⁾ また周兆望氏は晋代において北方の喫茶が次第に盛んになったものの、南北朝時代の喫茶は南北の格差が大きくなったと指摘し、さらにその原因について、茶の生産地・飲食習慣・喫茶の伝統・遊牧民の中原進出・北朝の上層部が喫茶を提唱しなかったことを挙げている。³⁾ 朱自振氏はより全面的な研究を行い、「西晋、少なくとも洛陽の一部の高官は喫茶を始めていた」と指摘した。⁴⁾

以上の中国で行われた研究に存在する共通的な問題は、学問的な相互継承・批判を欠いており、史料に対する独自の考証を加えることも不十分なことである。

日本において布目潮風氏は『茶経』の訳注で史料に対する考証を行い、また、『中国喫茶文化史』で南方の喫茶に高い評価を与え、北方にも浸透していたとも指摘した。⁵⁾

いずれにしても魏晋南北朝における喫茶文化の地理的な特徴についてわずかに触れる程度にとどまっている。しかし茶史から見れば、魏晋南北朝の喫茶は地理上どの程度発展したかということが問題になるし、喫茶の歴史からいうと魏晋南北朝は早期であるから、喫茶の起源にも繋がるものである。それは地理的な特徴を考察することによって窺える。よって本研究では喫茶文化の地理的な特徴に注目し、先学の研究成果を継承・批判しながら、独自の史料の考証のもとで綿密な論証を加えて進めたいと思う。

一、茶の生産地

ここでは、茶の生産地について、おおむね長江の上流から下流の順序に従って、魏晋南北朝から唐初までの時代における茶の産地の分布状況を考証する。

1、巴・涪陵

茶の産地については、陸羽と類書の編集者ともに疎略にみられていた『華陽国志』の中に具体的な記録がある。まず巴である。

その地方は、東は魚復に至り、西は夔道に至り、北は漢中に接し、南は黔水・涪水に極む。その土地には五穀を植え、家畜は六畜がそろっている。桑・蚕・麻・紵（麻の一種）・魚・塩・銅・鉄・丹・漆・茶・蜜・靈龜・巨犀・山鶏・白雉・黄潤（極めて精薄な生絹）・鮮粉（不明）など、全部献上される。その果実の珍しいものは、樹木類に荔枝があり、蔓生植物類に辛蒟（ふうとうかずら）、園に芳蒟（香りの高いがま）・香茗・給客橙（みかんの一種）・葵がある。⁶⁾

巴というのは古代の民族名・国名である。晋代になると、巴郡の管轄地域は江州・墊江・臨江・枳の四つの県となった。⁷⁾ その巴が朝廷に献上した貢物のなかには茶があった。

巴がいつから茶を献上するようになったか明確に分かっていないが、常璩が『華陽国志』を著した東晋時代以前にはすでに始まったことは疑いない。それは茶を献上することの最初の記録の一つである。

巴の珍しい栽培植物の中には「香茗」があった。これは最初の栽培の茶樹についての史料である。杜育は「筭賦」の中に茶樹の地理的な位置を書いており、⁸⁾ このことから当時茶の栽培地を選んでいたと考えられる。よって、晋代には茶樹の栽培が始まっていたと見てよい。

常璩は前掲の概説に続いて、巴に所属する郡県の風土や物産および歴史について具体的に述べた。その中の涪陵郡は東漢の末、劉備によって設置された。その範囲は、「東は巴東に接し、南は武陵に接し、西は牂牁に接し、北は巴郡に接す」とあり、すなわち現在の四川彭水・黔江・酉陽などの範囲に及ぶ。晋の永嘉以降、涪陵郡は一度廃止され、また永和中期に再び置かれ、その時郡都は枳県（現在の涪陵の東北部）に移った。涪陵郡の物産は、「ただ茶・丹・漆・蜜・蠟を産出する」のみである。⁹⁾ 巴の地域に茶を産出する記事はこれしかないため、涪陵郡は巴の主な茶の生産地と思われる。

2、什邡・南安・武陽

蜀というのは巴と同じ古代の民族名兼国名であり、現在の四川省中西部に位置する。晋代になると、蜀郡の行政区域は成都・広都・繁・江原・臨邛・卑の六つの県となった。¹⁰⁾

広漢郡の条の下に、「什邡県、山からいい茶が産出する」とある。¹¹⁾

什邡県の範囲は現在の四川省什邡県南部及び彭県の一部である。宋代の什邡県には茶の市場があった。¹²⁾

犍為郡の条の下に、「南安と武陽は皆名茶を産出する」とある。¹³⁾

犍為郡の都は武陽県であり、その範囲は現在の四川省彭山・新津・仁寿・井研・眉山などの県及び双流の南部までに及ぶ。西漢の王褒の「僮約」にある「武陽買茶」¹⁴⁾ という話によると、西漢には武陽がすでに有名な茶の産地であったことがわかる。

南安县の行政区域は現在の樂山・青神・丹棱・洪雅・夾江・峨眉・犍為・沐川・榮県などの地域に相当する。

3、南中

『華陽国志』によると、南中地区には牂牁・平夷・夜郎・晋寧・建寧・平樂・朱提・南広・永昌・雲南・河陽・梁水・興古・平西の諸郡が属し、現在の大渡河の以南の四川と雲南・貴州両省に相当する。『三国志』の中に「南中の諸郡は、そろって叛乱をおこした」とあり、¹⁵⁾ 南中が地域名として用いられている。

三国時代の傅巽は「七誨」に各地方の代表的な農産物を列挙しているが、そのなかに「南中茶子」が現れている。¹⁶⁾ 陸羽はこの「茶子」が茶を指すとはっきり断言した。つまり三国時代において、南中はすでに茶の産地として有名であったという意味である。南中は広がったが、その具体的な茶の産地は『華陽国志』に平夷県（現在の貴州畢節）が挙げられ、「山から茶・蜜が産出する」とある。¹⁷⁾

4、武陵

陸羽が『広雅』として引用する資料に「荆・巴の間では葉を摘んで餅茶を作る」というものがある。¹⁸⁾ 『広雅』の文ではないことは確実であるが、陸羽以前の史料として本論に用いることができる。

漢の武帝の時設置した荆州の範囲は、現在の湖北・湖南両省と河南・貴州・広東・広西の一部に相当する。三国時代には魏と呉ともに荆州があったが、西晋においてその二つを合わせた。

『荆州風土記』に、武陵郡の七つの県はすべて茶を産出し、最もいい、という。¹⁹⁾

『荆州風土記』という書物は『北堂書鈔』『芸文類聚』『太平御覧』などにも引用されているが、著者は不明である。また、晋の范汪・南朝宋の盛弘之・庾仲雍・郭仲産はそれぞれ『荆州記』という書物を著した。『荆州風土記』はその中の一種である可能性も十分ある。

晋代の武陵郡は臨沅・龍陽・漢寿・沅陵・黟陽・西陽・鐔城・沅南・遷陵・舞陽という10県を総轄していた。²⁰⁾ しかし、その茶の産地である七県の県名については、詳細に考証することができない。

『齊民要術』に引用された『荆州地記』には「浮陵の茶は最もいい」という。²¹⁾ 陶弘景は「符陵は涪州であり、巴郡の南に接する」といい、²²⁾ つまり、「符」と「涪」は同音字で、通用することができる。よって、繆啓愉氏は「浮陵」という地名がないため、「浮陵」は「涪陵」であると推論した。上記の2通の引用文を読むと、同じスタイルであり、『荆州風土記』が『荆州地記』となってもおかしいとは言えず、同一の出典と思われる。「浮陵」は「武陵」の書き違いではないかと考えられる。

5、西陽・武昌・廬江・晋熙・巴東

『桐君録』にいう、苦菜は三月に枝が四方に広がっていき、六月に花が葉から出る。茎はまっすぐで黄色である。八月に実る。実が黒くなると落ちて、また根が生える。冬に枯れない。今の茗はこれと極めて似ている。西陽・武昌及び廬江・晋熙（の茗）は皆よく、東方の人は青茗を作っている。（中略）又、巴東の間に別に真茶があり、加熱すると曲がる。飲めばまた人は眠れなくなる。恐らくこれであろう。²³⁾

西晋には弋陽郡を分けて西陽国を設置し、西陽県（現在の湖北黄崗の東）を国都とした。東晋になると、西陽国は郡に変わった。南朝宋において西陽郡は現在の湖北の倒水の東、長江の北、蘄水の西に当たる地域である。²⁴⁾

西晋時代の武昌郡は現在の湖北の長江の南側、嘉魚・咸寧・通山などの県の東側及び江西の九江・瑞昌に位置する。²⁵⁾ 『続搜神記』にはこの地域で茶摘みが行われたという記事がある。

晋の孝武帝の時代（373-396年在位）、宣城（現在の安徽省宣城）の人の秦精はかつて武昌山に入り茗を摘んでいて、突然ある人を見た。（彼は）身長が一丈であり、体全体に毛が生えている。秦精は彼を見て大いに怖れたが、毛人は直ちに彼のひじを牽いて、山の隅にある茗の大変群がり生えた所に連れて行って、彼を放してすぐに去った。しばらくして再び戻ってきて、そこで懐ろにあるみかんを探って秦精に与えた。秦精は非常に怖れて、茗を背負って帰った。²⁶⁾

武昌山は湖北東部鄂城市から南へ百九十里離れ、安徽省に隣接する。今でも、湖北で毛人を発見したと言われることがあるが、具体的な場所は湖北と四川との境における神農架に変わった。しかし、科学的な調査では証明されなかった。

廬江郡の範囲はたびたび激しく変化した。晋代において、その範囲は陽泉・舒・灄・皖・尋陽・居巢・臨湖・襄安・龍舒・六など十県であり、²⁷⁾ 現在の安徽の長江の南、涇県・宣城西の地域、江西信江流域およびその北側の地域までに及ぶ。晋の安帝の義熙年間（405-418年）に、廬江郡を分けて、晋熙郡を設置した。皖県が懷寧県（現在の安徽潜山）に変えられ、晋熙郡の都となった。²⁸⁾ 晋熙郡の設置する年代と南朝梁の陶弘景に引用されていることから、『桐君録』、即ち『桐君薬録』²⁹⁾ は晋の義熙年間から南朝宋・齊の間に書かれた書物だと推論できる。³⁰⁾

また、巴東郡は魚復・朐肭・南浦三県を所属し、³¹⁾ 現在の四川開県・万県の以東から、巫山の西部以西の長江南北及び大寧河の中上流一帯に当たる。

6、溱浦

『坤元録』に、辰州溱浦県の西北三百五十里に無射山ぶえきざんがある。蛮人の風俗ではおめでたい時、親族が集会し、山上で歌舞をする。山には茶樹が多いという、とある。³²⁾

『坤元録』は唐の太宗の四人目の息子である李泰が主催して編纂させた地理書である。³³⁾ 溱浦県は前述した武陵郡の領内にあり、現在においても、湖南省の溱浦県は茶油の生産基地として有名である。

7、臨城・臨蒸

『茶経』に引かれた『括地図』は「臨遂県の東一百四十里に茶溪がある」とあるが、³⁴⁾ 「臨遂」という県名は文献に見えない。

『太平御覧』は「『括地図』に、臨城県の東北一百四十里に茶山・茶溪がある、という」と引用している。³⁵⁾ 臨城県については、『元和郡県図志』に、

青陽県は、本々漢の涇県の地域であり、天宝元年（713年）洪州都督の徐輝は、呉に設置された臨城県の南に（青陽県を）置くことを奏上した。（青陽県は）宣州に属し、青山の南にあるため名前となった。³⁶⁾

とある。

臨城県は現在の安徽省青陽県の南にある臨城鎮に位置し、相変わらず茶の産地である。しかし臨城県は隋初に廃置され、南陵県に合併した。ゆえに新旧両『唐書』の「地理志」に臨城県は記録されていない。唐代の臨城県は現在の河北省臨城県であるが、茶の産地ではない。なお『括地図』は

散逸したため、直接考証することが不可能である。

さらに『茶経』や『太平御覧』に引用された『括地図』についてはいろいろな疑問がある。

「括地図」という言葉は裴秀の『禹貢地域図』の序に最初に現れた。

今の秘書監には古代の地図がないうえ、また蕭何が得たものもなく、ただ漢代の『輿地』及び『括地』など諸雑図のみがある。それぞれ分率（スケール）^{ぶんりつ}を設けておらず、準望（地図を製作する方法）^{じゅんぼう}も考証しなかったし、また名山・大川も揃って載せていない。大体の形があるけれども、皆つまびらかではなくて、根拠にすることができない。或いは荒外・迂誕の話で、事実と合わず、道理において取るに足りない。³⁷⁾

裴秀は晋の武帝の太始7年（271年）に亡くなったため、『禹貢地域図』は遅くとも西晋初年の書物である。裴秀は『括地図』の特徴について「荒外・迂誕の話」と指摘した。この特徴は『水経注』などの引用によって証明することができる。『水経注』に、「『括地図』に、馮夷はいつも雲車に乗り、二匹の龍を御する」とあり、³⁸⁾これは『括地図』を引用した最も古い文である。『茶経』などに引用された『括地図』の性質と合わない。

しかし、『括地図』の内容はすべて荒唐な記事とは言い難い。よって『括地図』である可能性はないわけではない。しかし次に述べるように臨城県の地名の考察からそれは否定できる。

臨城県は三国呉の赤烏年間（238—250年）に設置された。よって『括地図』は三国から晋初の間にできた書物であるという結論が出てくる。しかしこの結論は、裴秀の『括地図』が漢代の書物であるとする認識と相違する。裴秀は三国時代の人物であるから、その判断は正確なはずである。また、漢代の『括地図』には三国時代の地名が出るはずがないから、やはり問題がある。

最後に、それほど厳密とは言えないが、陸羽はほぼ時代順で史料を編纂した。『括地図』は唐初の『坤元録』の後ろにあるため、唐代の書物ではないかと思われがちがある。しかしさらに宋代の地理書を調べると、意外なことが分かった。

『太平寰宇記』は「『括地図』に、臨蒸県の東一百四十里に茶溪がある」とあり、³⁹⁾地名が変わっている。『輿地紀勝』では「『括地志』に、臨蒸県の百余里に茶溪がある」と、⁴⁰⁾書名まで変わってしまっている。

臨蒸県は現在の湖南衡陽である。『読史方輿紀要』の「衡陽県」条には、

漢の承陽・酃二県の地域は長沙国に属する。三国呉では二県の地域を分けて臨蒸県を置き、衡陽郡に属していた。晋代では湘東郡に属し、宋・齊はこれに従って、湘東郡の郡都となった。隋には郡を廃置して県に改め、衡陽と名づけ、衡州の州都となった。唐の初頭、戻して臨蒸県という。

『衡州志』に、呉は臨蒸県を設け、蒸水に臨んでおり、水気が蒸発しているようであるため名づけた。⁴¹⁾

とある。茶溪は茶陵江を指し、『元豊九域志』に「茶水」と称している。⁴²⁾茶山についての史料は次の「茶陵」の考証に掲載する。

書名が似ているから、諸岡存は『括地図』と『括地志』と関わりがあると推測し、⁴³⁾呉覺農は両

者が同一の書籍であると断言する。⁴⁴⁾ また布目潮風氏は「『括地志』の図であろう」とする。⁴⁵⁾

『括地図』については前述したが、『括地志』は李泰が主催して編纂させた地理書である。『新唐書』に、

『括地志』は五百五十巻で、またその「序略」が五巻ある。魏王の李泰は著作郎の蕭徳言、秘書郎の顧胤、記室参軍の蒋亜卿、功曹参軍の謝偃と蘇勗に命じて著述させた。⁴⁶⁾

とある。筆者は『括地図』は『括地志』の誤りで、臨城或いは臨遂は臨烝の誤りであると考ええる。

8、茶陵

陸羽は多種の図経を引用している。『隋書』郎茂伝に、「郎茂は『州郡図経』一百巻を著述して献上した。(皇帝は彼に)帛三百段を賜って、その書物を秘府に収めた」とある。⁴⁷⁾ 『隋書』経籍志に、「『隋諸州図経集』一百巻、郎蔚之撰」とある。⁴⁸⁾ 両『唐書』では『隋図経集記』となっている。⁴⁹⁾ また『太平御覧』と『太平寰宇記』ではほぼ『隋図経』となっている。陸羽が引用した諸図経は郎茂の『隋諸州図経集』のはずである。それはただ諸州の図経を分けて記述するだけのものであった。宋代の類書ではそうした形式で引用されている。

『茶経』に、「茶陵について、『図経』に、茶陵とは、陵谷に茶茗が生えているからいう、という」とある。⁵⁰⁾

従来の標点本や注釈本は『茶陵図経』としている。当たり前と思われるかも知れないが、茶陵は州郡名として使われたことはなかったため、『茶陵図経』という書名はありえない。『太平御覧』飲食部に「茶陵県、『図経』曰、茶陵者、謂陵谷生茶茗」とあり、⁵¹⁾ 王仁湘氏は『茶陵県図経』と句読している。⁵²⁾ 茶陵県は江西省と隣接している。「南が茶山に隣接しているため、県名もそれとなった」⁵³⁾ とある。

『太平御覧』州郡部の衡州の条に、「『図経』曰、茶陵県者、所謂陵谷生茶茗焉」とある。⁵⁴⁾ ここの『図経』は『衡州図経』のはずである。清代の陳運溶が『荆湖図経三十六種』を編集する時にも、『衡州図経』としている。隋の開皇年間(581—600年)に衡州を設置した。その地名は衡山からである。唐代における衡州の地域は現在の湖南衡陽・安仁・攸県・茶陵・酃県・衡東・衡山・常寧・耒陽等に相当する。

9、黄牛、荆門、女観、望州

『夷陵図経』に、黄牛、荆門、女観、望州などの山には茶茗が産出する、という。⁵⁵⁾

隋の大業3年(607年)、峡州が廃止され、夷陵郡が設置された。その地域は現在の湖北宜昌・枝城・遠安等の市県に相当する。黄牛山は湖北宜昌の西側に位置している。『水経注』には下記のように黄牛山の名前の来歴を説明している。

南岸には複嶺が重なり立っている。最もそとの高いがけの間に石があり、その模様は人が太刀を背負って牛を牽くようになっている。人は黒く牛は黄色くて、できあがった(画像は)はっきりとなっている。⁵⁶⁾

荊門について、南朝宋の盛弘之の『荊州記』によると、

郡の西へ長江を六十里溯って、南の岸に山があり、その名を荊門という。北の岸に山があり、その名は虎牙という。二つの山は向かい合い、楚の西の要塞である。(中略)荊門の上方はかさなっていて、下方は広がっていて、山の南に通達する。ドアの形になるため、名前となった。⁵⁷⁾

とある。

女観山に関して、『水経注』に、

(夷道) 県の北に女観山があり、その所は高くあらわれて、振り返り眺めると見渡す限りである。古老は、昔物思いにふける婦人がおり、夫は蜀に勤め、たびたび約束の期日を誤った。(婦人は)この山に登り、絶望して憂いを感じて亡くなった。山の樹木は全部枯れた。村人は彼女を哀れみ、よってこの山に名づけて女観とした。彼女を山の頂上に埋葬し、今もぽつんとその墓がまだある、と伝えていう。⁵⁸⁾

とある。女観山は枝城の北に位置する。

同じ『水経注』に望州山に関する記事もある。

(望州) 山の形はそばだてて険しい。峰はぬきんでて非常に高い。東北に白い岩が壁のようにたち、西南にちょっとした通り道がある。その山頂に登ると、平らで三畝余りあるよう。上に古い城があり、城中に水がある。城に登ると全州の境まで遠くを見渡せるため、望州山と名づけられた。俗語が誤って、今では武鐘山という名である。⁵⁹⁾

夷水とは現在の長江の支流である清江及びその上流の小河であり、夷道県の北部を経て、長江に注ぐ。望州山はこの辺りにある。

つまり、黄牛・荊門・女観・望州の四つの山は、長江中流の夷陵と夷道、現在の宜昌と枝城の間にあった。さらに上流へ行けば長江三峡である。『太平御覧』に引用された『夷陵図経』に荊門山がないのは書き漏らしと考えられる。⁶⁰⁾

10、余姚

晋代の王浮の『神異記』に、「余姚の虞洪は山に入って茶を摘む」という記載がある。⁶¹⁾ 余姚は現在の浙江余姚である。『晋書』によると、余姚の南側に句余山がある。⁶²⁾ 虞洪がこの山で茶摘みをしていたかもしれない。

11、烏程

南朝宋の山謙之は文帝の時代に史学生から学士に昇進した。孝建(454—456年)初期、奉朝請として在任中に亡くなった。⁶³⁾ 彼の『呉興記』によると、烏程(現在の浙江湖州)県の西北側へ二十里離れた所にある温山は御用の茶の産地である。⁶⁴⁾

12、永嘉

『永嘉図経』に、永嘉県の東三百里に白茶山がある、という。⁶⁵⁾
永嘉県は今の浙江省温州市である。

13、山陽

『淮陰図経』に、山陽県の南二十里に茶坡がある、という。⁶⁶⁾
東魏には淮陰郡が設置され、山陽県は現在の江蘇省淮安市である。

14、安州

両晋の間、劉琨の「兄の子の南兗州刺史の劉演に与える手紙」に、

以前安州の乾茶二斤、薑一斤、桂一斤を得、皆必要である。私の体中は気分がくしゃくしゃすると、いつも真茶によっている。あなたは信じてこのようにするべきだ。⁶⁷⁾

とある。東晋の成帝の咸康4年から8年まで、安州が一時的に四川省と貴州・雲南の境におかれたことがある。⁶⁸⁾ この地方が茶・生姜・桂の産地というのは事実であり、西晋の初の元康3年(294年)に亡くなった孫楚の「出歌」にも、「姜桂茶芽は巴蜀に出る」とある。⁶⁹⁾ しかし、劉琨は晋の元帝の建武元年(317年)に亡くなったため、成帝の時の地名を使うはずがない。よってこの安州のことは不詳である。

15、「魏晋南北朝初唐の茶産地の分布図」について

以上の考証によって「魏晋南北朝初唐の茶産地の分布図」を作成した。⁷⁰⁾ 古今変わらず茶の生産地は長江に沿って分布していた。成都を中心とする茶の生産地は比較的歴史が長い。『華陽国志』の御陰でいくつかの県名も分かった。ほかの地域は史料のできた年代により具体性を左右する傾向がある。新しいほど詳しくなっている上に、茶の生産地は東に発展していたとも思われる。御用の茶園も浙江にある。歴史上、御用の茶園は最高の技術を持っていたことによって、製茶の技術は東部の方が進んでいたとも推論できる。六朝の政治・文化・経済の中心地であることは、江蘇・浙江の茶の産業が一層発展させた主な原因であると考えられる。

二、喫茶の地域

茶の産地は喫茶の最も早く普及する地域である。以上の茶の生産地についての考証には、早期の喫茶風習が普及する地域の分布の状況も反映されている。以下では喫茶の史料の地理的な特徴を考察してみる。

1、四川

荊・巴地域にある餅茶の加工・飲用方法について比較的詳細に紹介されている。

『広雅』に、荆巴の間では、葉を摘んで餅茶を作る。葉の成熟したものは餅状になるため米膏を加えてこれが作られる。茗を煮て飲みたい場合、まず炙って赤色にさせる。それから粉末を臼で搗いて瓷器の中に置く。湯を注いでかぶせる。葱・生姜・みかん（の皮）を使って茶に混ぜる。⁷¹⁾

晋代の郭璞は『爾雅』中の「檟」を注釈して、「蜀の人はこれに名づけて苦茶という」という。⁷²⁾ 四川と中原及びその他の南方地域にある茶の文字表現における相違点を強調している。これからみると、「苦茶」とは四川の独特な文字表現方法である。

四川、特に成都における喫茶風習の盛んになる様子は、張載の「登成都白菟樓」詩や杜育の「荈賦」に書かれている。⁷³⁾ 「登成都白菟樓」詩に描写されているのは張収およびそのまわりの地方官吏や豪族が行った宴席の風景であった。詩の中に「芳しい茶は六清に冠んで、その最高の味わいは九州に伝わっている」といい、⁷⁴⁾ 茶は中国の最高の飲料として評価されている。

早期の喫茶の史料は四川に集中している。よって顧炎武は、「秦国が蜀国を滅ぼした以後から、始めて茗を飲むようになった」と推論した。⁷⁵⁾

2、江蘇

南京は三国の呉、東晋及び南朝の諸代、いわゆる六朝の首都である同時に、文化の中心でもある。したがって喫茶の史料も相対的に集中している。

三国時代において、呉国の宮廷宴会に茶が既に現れている。『三国志』に、

孫皓は宴会を開くごとに、終日しない時はない。その席に加わった者は飲めようか飲めまいか、だいたい七升を責任額とした。全部飲んでしまうわけではないが、みな注ぎ込んで片付けた。韋曜はもとより酒が二升しか飲めなく、初め特別の礼遇を受けた時、いつも減らされ、或いはひそかに茶菴を賜って酒の代わりにした。寵愛が衰えてくると、強制され、いつも罰を受けた。⁷⁶⁾

とある。場所は首都の建業である。

晋代に至って、陸納は来訪者の謝安を茶でもてなそうとした。『晋書』に、

謝安はあるとき陸納を訪問しようとしたが、陸納は特別な準備をしなかった。陸納の兄の子の陸倕はあえてこれを訪ねず、こっそり準備した。謝安が来たところ、陸納に設けられたのはただ茶果だけであった。陸倕はついに立派なご馳走をならべ、珍しい料理はちゃんとそろっていた。客が帰ってから、陸納は激しく怒って、お前は父叔のことを輝かせなかった上に、また私の質素のやり方まで汚したのか、という。よって杖で四十たたいた。⁷⁷⁾

とある。

それ以外にも王濛は他の士大夫に「水厄」とみられるほど喫茶が大好きであったし、⁷⁸⁾ 弘君挙は「食檄」に宴会の中の茶を描写した。⁷⁹⁾ また南朝斉の武帝は自分と昭皇后が好きな茶を祭祀する時の供物に定めた。⁸⁰⁾ 簡文帝の蕭綱が即位する前に、劉孝綽に茶を寄贈したこともある。⁸¹⁾ これらの茶に関するエピソードは皆首都の建康を背景とするものである。

建康以外の江蘇地域にも喫茶の史料が残されている。

広陵郡の郡都は広陵県、即ち現在の揚州である。晋の元帝の時代における茶の商売に関する物語は揚州を地理的な背景とした。⁸²⁾

呉中の豪族は喫茶の作法を利用して、蘇州の金昌亭で南渡したばかりの褚裒を愚弄した。⁸³⁾

3、安徽

丹陽郡姑孰（現在の安徽当塗）は戦略上において長江の重要な渡り場であり、首都建康に通じる門戸である。だから桓温はそこに駐屯した。彼が茶宴を設けたことや、⁸⁴⁾ 彼の部下が病気で大量の茶を飲んだこと⁸⁵⁾ は安徽でのことと考えられる。

また、僧侶の曇濟は八公山（淮南郡寿春、現在の安徽寿県にある）で南朝宋の王子である劉子尚と劉子鸞を茶でもてなした。⁸⁶⁾

4、浙江

陳務の妻子は会稽郡剡県（現在の浙江嵊県）にある自宅で茶を供え物としてから飲んだ。⁸⁷⁾

僧侶の法瑤は呉興郡武康（現在の浙江徳清）にある小山寺で喫茶していた。⁸⁸⁾

5、河南

南朝宋の『江氏家伝』には愍懐太子が茶の商売をする記録がある。

江統、字は応元で、愍懐太子の洗馬につく時、上書して諫めていうには、今、西園で醃・麩・藍子菜・茶の属を売っているのは、国の体面を損なうものでございます、とある。⁸⁹⁾

西園は御園であり、時々倉庫が建てられた。例えば、

『山陽公載記』に、当時官職を売り、二千石の職は二千万で、四百石の職は四百万であり、道徳で選ばれる者はこれの半分、或いは三分の一にする。西園に庫を立ててその金を蓄える、という。⁹⁰⁾

とある。

洛陽は茶の産地ではないため、この茶は西園の倉庫に貯蔵された貢茶であろう。歴代、皇室の必要以上に膨大な数量の茶が献上されていた。愍懐太子は恵帝の元康9年(299年)に廃せられたので、西晋初年には貢茶の制度がすでに成立していたと考えられる。

また、個人も茶を献上していた。東晋初年に、温嶠は皇帝に茶を献上した。『本草衍義』に「また晋の温嶠は上書して、茶千斤、茗三百斤を献上した」とある。⁹¹⁾ かなりの量であったため、おそらく後世と同じ皇室の飲用だけではなく、臣下に賜ることもありうる。

巴郡などの貢茶は制度であり、皇室の喫茶を支える主なルートである。貢茶の制度が整備されたことから洛陽にいる皇室・貴族は一般的に喫茶をするようになった。

『晋四王起事』に、恵帝が都から逃げ出した。洛陽に帰った時、黄門は素焼きの盃に茶を入れて、至尊に奉った、とある。⁹²⁾

愍懷太子の商売は洛陽で喫茶がより広く普及したことを背景としていると考えられる。左思は「嬌女詩」に愛嬢の恵芳と純素の無邪気で活発の性格を描写し、特に茶を立てることを挙げた。

二人心を合わせてご馳走に向かい、ちょこんと座って皿の中をととのえる。
 筆や墨は箱に収めて撫でていたかと思うと、二人そろってしばしば逃げ出す。
 物売りの鳴らすどらや鐘にはわざわざ外へ出、靴の行くにまかせて歩く。
 ただ茶を立てる時はじっとしているが、口で釜の火を吹いたりしはじめる。
 それで白い袖に油染みが広がり、すすが布地を真っ黒に染める始末。
 着物は皆汚れでべたになり、水につけて洗い落とすのも容易じゃない。
 娘達の気ままにまかせているが、娘達も目上の人に叱られるのは恥ずかしいようだ。
 杖で打たれるぞという話をちらりと聞くと、もう涙をおさえてそろって壁の方を向く。⁹³⁾

左思の描写から見ると、茶を立てることはかなりの魅力があって、活気な娘の注意力を集中させることができたようである。「茶筴」という言葉からこれは茶のことであるのは明らかである。前掲『三国志』韋曜伝にも「茶筴」という言い方があるが、「茶」という文字は中唐以後用いるようになったため、『三国志』が著された当初では「茶筴」としたはずである。詩によって娘たちが稚拙に茶を立てる一枚の絵画が目の前に現れた。彼女達の喫茶に夢中になる様子は大人の世界を間接的に反映している。⁹⁴⁾

316年、劉聰は西晋を滅ぼして、北方は五胡十六国時代に入り、割拠混戦に陥ってしまった。喫茶に関する史料一つも残されなかった。⁹⁵⁾

先に劉琨の「兄の子の南兗州刺史の劉演に与える書」を挙げたが、当時劉琨は并・冀・幽三州の軍事を取りしきり、北方に転戦していた。⁹⁶⁾ 頻繁に移動していたため、具体的な場所を言い難い。喫茶の嗜好を身につけた人にとって、客観的な条件が揃えば、どこに行っても自然に喫茶の習慣を持っていく。

十六国時代の喫茶の史料はほとんどないが、北魏の喫茶状況によれば、洛陽、さらに広く言えば北朝の喫茶風習が、遊牧民族の政権によって完全に抹殺されたとは言えないことを証明できる。

後魏楊衒之『洛陽伽藍記』には北魏の首都の洛陽にある喫茶の状況を記録している。

王肅は国に入る当時、羊肉および酪漿などの物は食べず、いつも鯽魚羹を食べ、喉が渴くと茗汁を飲んだ。都の士人は、王肅は一度に一斗飲む、と言い、漏卮とあだ名した。(中略) その時、給事中の劉鎬は王肅の風流を敬慕して、ひたすら茗を飲むことを習っていた。彭城王は劉鎬に、あなたは王侯の八珍を慕わず、蒼頭の水厄を好んでおられる。海辺に悪臭を追う男があり、居所に西施の鬢を習う婦人がある。あなたで言うと、まさにそれです、と言った。その彭城王の家に江南出身の召使がいたため、それに事寄せてからだったのである。これから朝廷の貴頭の宴会には、茗を設けて飲ませても、皆恥ずかしくて飲まなかった。ただ南朝からはるばる帰順してきた人々だけが好んだ。その後、蕭衍の子の西豊侯蕭正徳が帰順した時、元父は彼のために茗を設けようと思い、まず、あなたは水厄はどれくらいいけますか、と尋ねると、正徳はこの言葉の意味が分からず、私は水郷に生まれましたが、出世以来、陽侯の難に会ったことはございませぬ、と答えた。元父と満座の客はみな笑った。⁹⁷⁾

これらの史料はこれまでに挙げたような洛陽での喫茶の記録から約170年隔たっている。喫茶者は千差万別である。社会的な地位から見れば、その差が大きかった。元父・蕭正徳は皇族であり、劉鎬・王肅は朝廷の大臣であり、呉奴は社会のどん底にいる奴隷である。民族から見れば、元父・劉鎬は北方の鮮卑族の人で、蕭正徳・王肅・呉奴は南方の漢民族である。南朝から投降した人々は茶を日常的に飲んでいただかもしれないが、元父は儀礼として茶で蕭正徳をもてなし、給事中である劉鎬は王肅の風流を慕い、専ら喫茶を習った。

北朝の人々が茶を飲んだか否かについて、今までの研究では飲まないと主張する方が優位である。しかし朱自振氏は北朝でも茶を飲んでいただけと主張し、鮮卑族は茶を飲まなかったが、北朝にいる南方の人のために茶を用意していたため、北朝の社会における喫茶風習がそれこそ西晋から連綿して続いて来たことと纏めている。⁹⁸⁾この結論は元父や劉鎬が北方の鮮卑族の人であることを無視している。また、前掲史料には彭城王元勰が喫茶に夢中となった劉鎬を叱ってから、朝廷の高官らは恥ずかしくて茶を飲まなくなったという。すなわちそれ以前は大勢の鮮卑貴族は劉鎬のように喫茶をしていた。飲まないようになったことはやむをえない選択である。元勰がいなければ、まだ飲んでいただけと思われる。そして次の世代の鮮卑貴族である元父は自ら茶でもてなそうと提案した。よって遅くとも西晋から北方地域に喫茶の風習が形成していたと見ることができる。遊牧民族の政権のもとで喫茶の文化に一時的にマイナスの影響があったことは認められるが、まもなく漢民族と同じ考えで茶を飲むようになった。そして次の唐代には茶馬貿易の嚆矢が現れた。

6、山東

後魏の賈思勰は白醪の製法を解釈するとき、茶の立て方で白醪の加工方法を譬えた。

白醪の作り方、糯米一石を冷水でよく洗い、濾して出して甕の中に入れて、魚眼沸湯を沸かしてこれを浸す。一夜放置すると、米が強い酸味を生ずる。蒸す飯を作って、広げて冷やす。さらに魚眼沸湯をふりかける。その米を浸した二斗の水を煎じて六升にし、甕の中に入れて、竹掃でこれをたたいて、抹茶の泡のようにする。(下略)⁹⁹⁾

茶の立て方で例えたことはその地域で茶のことがよく知られていたことが窺える。すなわち茶を飲んでいただけを意味する。賈思勰は益都(現在の山東省寿光)人で、¹⁰⁰⁾高陽(今の山東省淄博)太守に就任したことがあった。賈思勰の面した読者は山東の庶民であるはずだから、よって山東の人々は一般的に茶を飲んでいただけと推論することができる。前掲任育長も山東樂安の人である。

7、「魏晋南北朝初唐の喫茶の分布図」について

茶の生産地を含める以上の考証によって「魏晋南北朝初唐の喫茶の分布図」を作成した。

流通によって喫茶風習がさらに広がった。喫茶の文献は北方については首都の洛陽に極端に集中したが、南方においてかなり多くの地域が見られ、首都の健康に関する記録はより多く出ている。当然のことでもあるが、南方の喫茶が北方よりかなり普及していたことを表している。喫茶に関する記事は南北とも首都に集中した。このことはまずその喫茶がほかの南方地域より流行っていたことを語っており、同時に文人はこの特別な地域に活躍していたことを窺わせる。この二点はまた互いに因果関係にある。すなわち風流である喫茶は文人達によく行われ、盛んになった喫茶は文人に

描写される割合を高くした。

あとがき

1、北方の喫茶について

西晋において貢茶の制度がすでに形成していたことは、喫茶風習は洛陽にある皇室に完全に定着していたことを明確に証明し得る。そして張載、杜育のような大臣は喫茶風習を一層流行させた。そして、左思の「嬌女詩」は北方出身の大臣の家族が喫茶する風景を描写している。また、市場で茶湯を売っていたことから、喫茶風習は洛陽で庶民まで普及したと考えられる。

喫茶は西晋時代に北方へ普及したが、その定着の程度についてはやはり疑問が残る。そして茶の生産地から外れていることを加え、分裂の情勢においてそのまだ十分馴染まれていない喫茶の風習が変わりやすいのではないかと疑われても当然なことだと思われる。よって東晋・南北朝における北方の喫茶についてはずっと非常に低く評価されている。

前述のように、西晋や北魏における北方の喫茶の史料は洛陽に集中している。北方のほかの地域では首都の洛陽と比べると、段差があることは当然であろうが、益都や高陽などの山東の人々はある程度飲んでいたことも『斉民要術』から証明された。西晋と北魏の間にある五胡十六国時代には劉劭に関する喫茶の史料しかなかった。この時代に喫茶の史料がほとんどない原因について、以下の三点が挙げられる。

- (1) 北方は遊牧民族に蹂躪され、喫茶の文化的な雰囲気はなくなったこと。
- (2) 戦乱のため交通が杜絶して、南方の茶が北方に運送し販売することができないこと。
- (3) 短命な王朝が興亡して、安定した文化中心地を形成することができなく、茶を飲んでも一定の規模にならず、記録されるはずがないこと。

そして、北魏が北方を統一してある程度安定した王朝ができてまもなく、洛陽において喫茶の史料が再び出てきた。さらに具体的に言うと、493年、北魏の孝文帝が平城から洛陽に遷都してからである。この時期に喫茶の史料が現れたことは、鮮卑族が喫茶の風習を受け入れたことを示しており、鮮卑族の漢化と密接に関係していると考えられる。また、民族を超えて、北方の生活様式が南方化していく一つのシンボルとも思われる。劉鑄は風流として喫茶を受け入れたが、これは漢民族と同じ考え方である。百年溯れば、それは不可能である。

北魏の初代皇帝の道武帝は賀狄干を派遣して、後秦の姚萇と婚姻関係を結ぼうとした。しかしちょうど姚萇がなくなって、賀狄干が抑留された。その後捕虜を交換する形でようやく北魏に帰った。

賀狄干は長安にいる時、書物を繰り返して読んで、『論語』『尚書』の諸経に通じていた。挙止が風流で、儒者のものであった。初め、帝が功臣を広く封じた時、狄干は姚興に抑留されていたけれども、はるかに狄干に襄武侯の爵を賜り、秦兵將軍を加えた。狄干が帰った時、帝は彼の言語・衣服が中国に似ていることを見て、慕ってそれを習ったと思ってしまう、故に怒った。まもなく彼を殺した。¹⁰¹⁾

賀狄干はかつて道武帝に厚く信頼されたけれども、帝が漢民族を習うことを許さなかったため、殺

された。これに比して劉鎬のほうが公然としていた。元勰に叱られても、それはいうまでもなく個人的な見解であり、劉鎬はそれを無視して喫茶に夢中になることができた。やはり時代が変わったのである。

要するに晋南北朝における北方では洛陽を中心に喫茶風習が遊牧民族の短命王朝から受けたマイナス影響があったとはいえ、漢化・南方化の進展に伴い発展していた。

2、南方の喫茶について

茶樹は南方の植物であり、茶はもともと南方の飲料であった。しかし南方と言ってもかなり広くて、また文化的な差も大きく、特に茶史の研究に対して喫茶の起源に繋がる問題であるため、南方すべてを同一視することができない。

茶が南方の飲料であるという認識については『洛陽伽藍記』の次の記事に見られる。

数日後、慶之は病気になる、胸に急な痛みを覚えたため、人を訪ねて治療してもらった。すると元愼が治せると自称するため、慶之は元愼に頼むことにした。元愼はそこで口に水を含んで慶之に吹きかけて言った、呉人の鬼、建康に住む。小さいな冠帽に、つんつるてんの衣裳。自ら阿儂と呼び、話すと阿がそばに付く。菰の芽と稗が飯、茗が漿にする。蓐の羹をガブガブ、蟹みそをクチャクチャ。手には豆蔻をつかみ、口には檳榔を噛む。にわかには中原へやってきて、故郷が思い慕う。早速去って、あんたの丹陽へ帰りなされ、(下略)と。¹⁰²⁾

永安2年(529年)、中原士族の楊元愼と南朝士族の陳慶之は南北朝の正統性について言い争った。数日後、陳慶之が急病になり、楊元愼は陳慶之の病気を治せると言い、呪文で南方の生活習慣を嘲笑した。その中で茶が南方の代表的な飲料として触れられた。

この史料に地理に関わる言葉は呉・建康・丹陽の三つである。朱自振氏は呉を三国時代の呉国、建康を現在の江蘇南京と鎮江、丹陽を安徽蕪湖と宣州に相当すると指摘している。¹⁰³⁾ 晋初以前の状況によって判断していると思われる。しかしこの事件は北魏(南朝梁)で起こった。晋の武帝の太康2年(281年)に建業は丹陽郡の郡都になり、東晋において建康は首都になった。それから丹陽太守は尹に変わり、南朝は続いた。¹⁰⁴⁾ よって楊元愼は建康・丹陽の地名を用いて、南朝を指したと考えられる。呉も南朝の意味で使用されていた。

茶は南方の飲料であり、南方の人々はよく茶を飲んだと言っても、「魏晋南北朝初唐の喫茶の分布図」によるとやはり茶を飲む風習はおおむね長江に沿って分布していた。さらに南の雲南・貴州・広西・広東地域に関する喫茶の記録は魏晋南北朝にはほとんどなかったが、その状況は唐宋まで続いた。特に雲南・貴州・広西における喫茶の史料が頻繁に現れるのは明清時代になってであった。ところで喫茶の起源はその地域に分布する少数民族からという説がある。しかし「魏晋南北朝初唐の喫茶の分布図」から見れば、その地域は完全に外れている。よって喫茶の少数民族起源説は考えにくい。¹⁰⁵⁾

魏晋南北朝の喫茶は文献学的な研究ができる最初の時代である。喫茶の風習は四川から全国に普及・定着してゆく。黄河流域にある漢民族の政治文化の中心地までへ普及する過程は決して順調ではなかったが、西晋には一度は首都の洛陽まで発展してきた。その開始は顧炎武の推論の通り戦国時代末ではないかと思われるが、文献記録がほとんどないため、研究が進まなかった。新たな文献

史料を発見する可能性は極めて低い、三星堆遺跡が発見されたことは、四川文化における茶についての研究の手掛かりが出ることに希望を与えてくれた。三星堆遺跡は、3000—4800年前長江の上流に栄えた蜀国の首都と見られ、黄河文明と並ぶ長江文明である。最近大規模な発掘調査が始まり、中原進出する前の喫茶の発生・発展に関わる資料があるかどうか注目したい。

謝辞:この研究はトヨタ財団研究助成を受けて行った。記して謝意を申し上げたい。2001年1月23日

注

- 1) 農史学者の石声漢は、「もっと重要なのは、当時茶の産地は江南だけで、南朝の人だけ喫茶の習慣があったのである。北朝の人は南朝の人の喫茶を嘲、「水厄」と言い、普通の士大夫は茶を飲まなかったのである」という。(『齐民要術今釈』巻7白醪麴第六十五、477頁、科学出版社、1958。)また西山武一と熊代幸雄はこの説を引用した。(『校訂訳注齐民要術』巻7白醪麴第六十五、29頁、東京大学出版会、1959。)
- 2) 「魏晋南北朝人士飲茶述略」、『農業考古』24巻2期201—202頁、1991。
- 3) 「略論魏晋南北朝飲茶風氣的形成和転盛」、『農業考古』27巻2期226—228頁、1994。
- 4) 『中国茶酒文化史』、20頁、文津出版社、1995。
- 5) 『中国喫茶文化史』81—105頁を参照。
- 6) 『華陽国志』巴志「其地東至魚復、西至夔道、北接漢中、南極黔涪。土植五穀、牲具六畜。桑・蚕・麻・紵・魚・塩・銅・鉄・丹・漆・茶・蜜・靈龜・巨犀・山鷄・白雉・黄潤・鮮粉、皆納貢之。其果实之珍者、樹有荔支、蔓有辛蒟、園有芳蕪・香茗・給客橙・葵」。
- 7) 『晋書』巻14地理志を参照。
- 8) 『芸文類聚』巻82草部下と『北堂書鈔』巻144酒食部・茶篇「靈山惟嶽、奇産所鍾。瞻彼卷阿、実曰夕陽。厥生莽草、彌谷被崗。承豊壤之滋潤、受甘霖之霄降」。
- 9) 『華陽国志』巴志「東接巴東、南接武陵、西接牂牁、北接巴郡。」「無蚕桑、少文学、惟出茶・丹・漆・蜜・蠟」。
- 10) 『晋書』巻14地理志。
- 11) 『華陽国志』蜀志「什邡県、山出好茶」。
- 12) 『元豊九域志』巻7成都府路。
- 13) 『華陽国志』蜀志「南安、武陽皆出名茶」。
- 14) 『古文苑』巻17僮約。
- 15) 『三国志』巻35蜀書・諸葛亮伝「南中諸郡、並皆叛乱」。
- 16) 『茶経』巻下七之事。
- 17) 『華陽国志』南中志「山出茶蜜」。
- 18) 『茶経』巻下七之事「荆巴間採葉作餅」。
- 19) 『北堂書鈔』巻144酒食部・茶篇「『荊州風土記』、武陵七県通出茶、最好」。
- 20) 『晋書』巻15地理志。
- 21) 『齐民要術』巻10五穀瓜蒴菜茹非中国物産者「浮陵茶最好」。
- 22) 『重修政和經史証類備用本草』巻3玉石部上品・丹砂「符陵是涪州、接巴郡南」。
- 23) 『重修政和經史証類備用本草』巻27菜部上品「『桐君録』云：苦菜三月生扶疏、六月華從葉出、莖直黄、八月実、実黒落、根復生、冬不枯。今茗極似此、西陽・武昌及廬江・晋熙皆好、東人正作青茗。(中略)又巴東間別有真茶、火煖卷結、為飲亦令人不眠、恐或是此」。
- 24) 『宋書』巻37州郡志。
- 25) 『晋書』巻15地理志。
- 26) 『芸文類聚』巻82草部・茗「晋孝武帝世、宣城人秦精嘗入武昌山採茗、忽見一人、身長一丈、通体皆毛。精見之大怖、毛人徑牽其臂、將至山曲大叢茗処、放之便去。須臾復来、乃探懷中橘與精。精甚怖、負茗而歸。」『統搜神記』の作者は東晋の陶淵明と伝えられていたが、陶淵明以後のことも述べているため、これは誰か陶淵明の作と偽ったものだと思われる。偽作であると言っても、南北朝時代に作られたものであるから、本論の論拠にならないとは言えない。もう一つの問題は今の『統搜神記』にこの文がない。

- 27) 同前掲。
- 28) 『読史方輿紀要』 卷 26 江南。
- 29) 『新修本草』 卷 18 菜部、『隋書』 卷 34 經籍志には『桐君葉録』とする。『重修政和經史証類備用本草』 卷 27 菜部上品、『茶經』 卷下七之事には『桐君録』とし、『桐君葉録』の略称である。
- 30) 明確な証拠が示さなかったが、布目潮風氏は『桐君葉録』が晋代の書物と考え（『茶經』、『中国の茶書』 126 頁、平凡社、1976）、矢野仁一は南北朝初期、宋齐のものとして推論している。（『茶の歴史に就て』、『茶道全集』 卷 1 茶説茶史篇、63 頁、創元社、1977）先学は『茶經』によって研究を行われ、「晋熙」は「晋陵」とし、晋陵についての考証はできなかった。筆者は『桐君葉録』と同じの医葉書の本草書を基本史料として用いている。地理的な特徴から見ると、つながっている西陽・武昌・廬江・晋熙の 4 郡は集中して論述されることも当然のことだと思われる。
- 31) 『晋書』 卷 14 地理志。
- 32) 『茶經』 卷下七之事「『坤元録』：辰州淑浦県西北三百五十里無射山。云蛮俗当吉慶之時、親族集会、歌舞於山上、山多茶樹」。
- 33) 『旧唐書』 卷 76 太宗諸子・濮王泰伝。『宋史』 卷 204 芸文志・史部・地理志類「魏王泰『坤元録』十卷」。
- 34) 『茶經』 卷下七之事「臨遂県東一百四十里有茶溪」。
- 35) 『太平御覧』 卷 867 飲食部・茗「『括地図』曰、臨城県東北一百四十里有茶山茶溪」。
- 36) 『元和郡県図志』 卷 28 江南道「青陽県、本漢涇県地、天宝元年洪州都督徐輝奏於呉所立臨城県南置、属宣州、在青山之陽為名」。
- 37) 『晋書』 卷 35 裴秀伝「今秘書既無古之地図、又無蕭何所得、惟有漢氏『輿地』及『括地』諸雜図。各不設分率、又不考正準望、亦不備載名山大川。雖有粗形、皆不精審、不可依拠。或荒外迂誕之言、不合事实、於義無取」。
- 38) 『水経注』 卷 1 河水「『括地図』曰、馮夷恒乘雲車、駕二龍」。
- 39) 『太平寰宇記』 卷 115 江南西道・衡州「『括地図』云、臨蒸県東一百四十里有茶溪」。
- 40) 『輿地紀勝』 卷 55 荆湖南路・衡州・景物上「『括地志』、臨蒸県百余里有茶溪」。
- 41) 『読史方輿紀要』 卷 80 湖広「漢承陽、酃二県地属長沙国。三国呉析二県地置臨蒸県、属衡陽郡、晋属湘東郡、宋齐因之、為湘東郡治。隋廢郡改県曰衡陽、為衡州治。唐初復曰臨蒸県。」「『衡州志』、呉立臨蒸県、以俯臨蒸水、其氣如蒸而名」。
- 42) 『元豊九域志』 卷 6 荊州路。
- 43) 『茶經評釈』 卷 2、89—90 頁、茶業組合中央会議所、1941。
- 44) 『茶經評述』 244 頁、農業出版社、1987。
- 45) 『中国の茶書』 127 頁。
- 46) 『新唐書』 卷 58 芸文志・史部・地理類「『括地志』五百五十卷、又「序略」五卷。魏王泰命著作郎蕭德言、秘書郎顧胤、記室參軍蔣亞卿、功曹參軍謝偃蘇曷撰」。
- 47) 『隋書』 卷 66 郎茂伝「茂撰『州郡図経』一百卷奏之、賜帛三百段、以書付秘府」。
- 48) 『隋書』 卷 33 經籍志。
- 49) 『新唐書』 卷 58 芸文志、『旧唐書』 46 卷經籍志。
- 50) 『茶經』 卷下七之事「茶陵、『図経』云、茶陵者、所謂陵谷生茶茗焉」。
- 51) 『太平御覧』 卷 867 飲食部・茗。
- 52) 『太平御覧・飲食部』 754 頁、中国商業出版社、1993。
- 53) 『元和郡県図志』 卷 29 江南道「因南接茶山、県以為名」。
- 54) 『太平御覧』 卷 171 州郡部・衡州。
- 55) 『茶經』 卷下七之事「『夷陵図経』：黄牛、荆門、女観、望州等山茶茗出焉」。
- 56) 『水経注』 卷 34 江水「南岸重嶺疊起、最外高峯間有石、色如人負刀牽牛、人黒牛黄、成就分明」。
- 57) 『文選』 卷 12 郭璞「江賦」の唐代李善注「郡西泝江六十里、南岸有山、名曰荆門、北岸有山、名曰虎牙、二山相對、楚之西塞也。（中略）荆門上合下開、開達山南。有門形、故因以為名」。
- 58) 『水経注』 卷 34 江水「県北有女観山、厥処高巔、回眺極目。古老伝言、昔有思婦、夫官于蜀、屢愆秋期、登此山、絶望憂感而死。山木枯悴、鞠為童枯。郷人哀之、因名此山為女観焉。葬之山頂、今孤墳尚存矣」。

- 59) 『水經注』卷 37 夷水「山形竦峻、峰秀甚高、東北白岩壁立、西南小演通行、登其頂、平可有三畝許。上有故城、城中有水、登城望見一州之境、故名望州山。俗語訛、今名武鐘山」。
- 60) 『太平御覽』卷 867 飲食部・茗。
- 61) 同前掲「余姚虞洪進山採茶」。
- 62) 『晋書』卷 15 地理志。
- 63) 『宋書』卷 14 礼、卷 16 礼、卷 100 自序。
- 64) 『吳興記』「烏程、温山（県西北二十里）出御筭」。
- 65) 『茶經』卷下七之事「『永嘉図経』、永嘉県東三百里有白茶山」。
- 66) 同前掲「『淮陰図経』、山陽県南二十里有茶坡」。
- 67) 『太平御覽』卷 867 飲食部・茗「晋興兄子南兖州刺史演書曰、前得安州乾茶二斤、薑一斤、桂一斤、皆所須也。吾体中煩悶、恒假真茶、汝可信致之」。
- 68) 『晋書』卷 7 成帝紀「(咸康 4 年) 秋八月丙午、分寧州置安州。(中略)(咸康 8 年) 冬十二月癸酉、司空、興平伯陸玩薨。除樂府雜伎。罷安州」。
- 69) 『茶經』卷下七之事「姜桂茶筭出巴蜀」。孫楚について『晋書』卷 56 孫楚伝を参照。
- 70) 県以下は「・」で標示、郡は点線で標示する。
- 71) 『茶經』卷下七之事「『広雅』云、荆巴間採葉作餅。葉老者餅成以米膏出之。欲煮茗飲、先炙令赤色、搗末置瓷器中、以湯澆覆之。用葱薑橘子芼之」。
- 72) 『爾雅注疏』卷 9 積木「蜀人名之曰苦茶」。
- 73) 拙論「筭賦から見る魏晋南北朝の喫茶の文化」(『立命館史学』20 号 27—55 頁) を参照。
- 74) 『全晋詩』卷 7 「芳茶冠六清、溢味播九区」。
- 75) 『日知録』卷 7 茶「自秦人取蜀而後、始有茗飲之事」。
- 76) 『三国志』卷 65 呉書・韋曜伝「皓每饗宴、無不竟日、坐席無能否、率以七升為限、雖不悉入口、皆澆灌取盡。曜素飲酒不過二升、初見禮異時、常為裁減、或密賜茶筭以當酒、至於寵衰、更見偏彊、輒以為罪」。
- 77) 『晋書』卷 77 陸納伝「謝安嘗欲詣納、而納殊無供辦。其兄子俶不敢問之、乃密為之具。安既至、納所設唯茶果而已。俶遂陳盛饌、珍羞畢具。客罷、納大怒曰、汝不能光益父叔、乃復穢我素業邪。於是杖之四十」。
- 78) 『太平御覽』卷 867 飲食部・茗に引く『世說新語』「晋司徒長史王濛好飲茶、人至輒命飲之、士大夫皆患之、每欲往候、必云今日有水厄」。
- 79) 『茶經』卷下七之事「寒温既畢、応下霜華之茗。三爵而終、応下諸庶・木瓜・元李・楊梅・五味・橄欖・懸豹・葵羹各一杯」。
- 80) 『南齊書』卷 3 武帝記「我靈上慎勿以牲為祭、唯設餅・茶飲・干飯・酒脯而已。』『南史』卷 11 后妃・齊宣孝陳皇后伝「(前略) 昭皇后薦茗糲炙魚。並生平所嗜也」。
- 81) 『茶經』卷下七之事「劉孝綽謝晋安王餉米等啓、傳詔李孟孫宣教旨、垂賜米酒瓜笋菹脯酢茗八種(下略)」。
- 82) 『茶經』卷下七之事「『広陵耆老伝』、晋元帝時、有老姥每旦獨提一器茗、往市鬻之、市人競買。自旦至夕、其器不減、所得錢散路傍孤貧乞人。人或異之、州法曹繫之獄中。至夜、老姥執所鬻茗器、從獄牖中飛出」。
- 83) 『世說新語』卷下輕詆第二十六「褚太傅初渡江、嘗入東、至金昌亭。吳中豪右燕集亭中。駙公雖素有重名、于時造次不相識、別敕左右多與茗汁、少箸粽、汁盡輒益、使終不得食。駙公飲訖、徐舉手共語云、褚季野。於是四坐驚散、無不狼狽」。
- 84) 『晋書』卷 98 桓温伝「温性儉、每讌惟下七奠拌茶果而已」。
- 85) 『統搜神記』卷 3 「桓宣武時、有一督將、因時行病後虛熱、更能飲複茗、必一斛二斗乃飽。纔減升合、便以為不足。非復一日、家貧。後有客造之、正遇其飲複茗。亦先聞世有此病、仍令更進五升、乃大吐、有一物出如升大、有口、形質縮纒、狀似牛肚。客乃令置之於盆中、以一斛二斗複茗澆之、此物噙之都盡而止、覺小脹。又增五升、便悉混然從口中涌出。既吐此物、病遂差。或問之、此何病。答云、此病名斛二(二或作茗)瘦」。
- 86) 『茶經』卷下七之事「『宋録』、新安王子鸞、豫章王子尚詣曇濟道人於八公山。道人設茶茗、子尚味之、曰：此甘露也、何言茶茗」。
- 87) 『異苑』卷 7 「岷縣陳務妻少與二子寡居、好飲茶茗。宅中先有古塚、每日作茗飲先輒祀之」。

- 88) 『茶経』 卷下七之事「釋道該說『續名僧伝』：宋釋法瑤、姓楊氏、河東（現在の山西省）人。永嘉（307—312年）中過江、遇沈臺真、請真君武康小山寺、年垂懸車、飯所飲茶」。
- 89) 『茶経』 卷下七之事「江統字応元、遷愍懷太子洗馬、常上疏諫云、今西園賣醢麩藍子菜茶之属、虧敗国体。」『太平御覧』 卷 867 飲食部・茗「今西園賣醢麩茶菜藍子之属。」『晋書』 卷 56 江統伝、『晋書』 卷 53 愍懷太子伝にも「茶」がない。諸岡存（『茶経評釈』 卷 2、8 頁）や布目潮風氏（『中国の茶書』、121 頁）は「応遷」となる。「遷」とは官職が変わることである。『茶経』には「元」が抜け落ちた。「江統伝」により補う。
- 90) 『後漢書』 卷 8 孝靈帝紀、唐李賢等の注「『山陽公載記』 曰：時賣官、二千石二十萬、四百石四百萬、其以德次應選者半之、或三分之一、於西園立庫以貯之」。
- 91) 『本草衍義』 卷 14 「又晋温嶠上表、貢茶千斤、茗三百斤」。
- 92) 『茶経』 卷下七之事「『晋四王起事』、惠帝蒙塵、遷洛陽、黃門以瓦盃盛茶、上至尊」。
- 93) 『玉臺新詠』 卷 2 嬌女詩「并心注肴饌、端坐理盤楯。翰墨戢函按、相與數離逖。動為鑪鉦屈、屣履任之適。止為茶菴據、吹嘘對鼎鑪。脂膩漫白袖、煙薰染阿錫。衣被皆重地、難與沈水碧。任其孺子意、羞受長者責。瞥聞當與杖、掩淚具向壁」。
- 94) 『世說新語』 夙惠には子供に関する風流の物語が収められている。
- 95) 『晋書』 卷 95 芸術・単道開伝「日服鎮守藥數丸、大如梧子、藥有松蜜薑桂伏苓之氣、時復飲茶蘇一二升而已。」『茶経』 卷下七之事に同じ記載があり、ただし「茶」を「茶」に変えた。よって陸羽は単道開が茶を飲んでいたと考えると明かにした。敦煌人の単道開は臨漳（現在の河北省臨漳）にある昭徳寺にいた。もしこの「茶」がたしかに「茶」であれば、この史料は僧侶にかかわる最初の喫茶の記録になるし、また十六国時代の珍しい史料となる。しかし中村喬氏の考証（「茶蘇考贅説」、『立命館文学』 第 386—390 号 327—348 頁、1977）によると「茶蘇」は菓草である。
- 96) 『晋書』 卷 62 劉琨伝を参照
- 97) 『洛陽伽藍記』 卷 3 城南・報徳寺「肅初入国、不食羊肉及酪漿等物、常飯鯽魚羹、渴飲茗汁。京師士子道肅一飲一斗、號為漏卮。（中略）時給事中劉鎬慕肅之風、專習茗飲。彭城王謂鎬曰、卿不慕王侯八珍、好蒼頭水厄。海上有逐臭之夫、里内有学顰之婦、以卿言之、即是也。其彭城王家有吳奴、以此言戲之。自是朝貴讌會、雖設茗飲、皆恥不復食。唯江表殘民遠來降者好之。後蕭衍子西豊侯蕭正徳降時、元乂欲為之設茗、先問、卿於水厄多少。正徳不曉訥意、答曰、下官生於水郷、而立身以來、未遭陽侯之難。元乂與拳坐之客皆笑焉。」「乂」が「又」となる場合もある。
- 98) 『茶史初探』 41 頁、農業出版社、1996。
- 99) 『齊民要術』 卷 7 白醪麴第六十五「釀白醪法、取糯米一石、冷水淘淨、漉出著甕中、作魚眼沸湯浸之。經一宿、米欲絶酢、炊作一餠飯、攤令絶冷。取魚眼沸湯沃、浸米埃二斗煎取六升、著甕中、以竹掃衝之、如茗渤（下略）」。
- 100) 『魏書』 卷 72 賈思伯伝「賈思伯、字士林、齊郡益都人」というから推論。
- 101) 『北史』 卷 20 賀狄干伝「干在長安、因習讀書史、通『論語』『尚書』諸經、举止風流、有似儒者。初、帝普封功臣、狄干雖為姚興所留、遥賜狄干爵襄武侯、加秦兵將軍。及狄干至、帝見其言語衣服類中国、以為慕而習之、故忿焉、既而殺之」。
- 102) 『洛陽伽藍記』 卷 2 城東・景寧寺「於後數日、慶之遇病、心上急痛、訪人解治。元慎自云能解、慶之遂憑元慎。元慎即口含水噴慶之曰、吳人之鬼、住居建康。小作冠帽、短製衣裳。自呼阿儂、語則阿傍。菘稗為飯、茗飲作漿。呷啜蓴羹、唼嚼蟹黃。手把豆蔻、口嚼檳榔。乍至中土、思憶本郷。急急去、還爾丹陽」。
- 103) 『茶史初探』 42 頁。
- 104) 『宋書』 卷 35 「州郡志」。
- 105) 布目潮風氏は喫茶の中国少数民族起源説を批判した。（『中国喫茶文化史』 45—54 頁、岩波書店、1995。）
（浙江樹人大学茶文化専攻副教授）

